筏

船と筏は陰陽にして、文と武にたとふべし、船は馬の如く、智者の如し、筏は牛のごとく、仁者の如し、船は廣大にして、又多端也、蒼海を走る大船あれば、泉水を漕ぐ小舟あり、長河を流るゝ高瀨舟あれば、大河を横たふわたし舟あり、丁子の薫る家根舟あれば、鼻を抓む葛西舟あり、せきこんだる猪牙船あれば、うごかざる石船あり、湯船は浴するに足れども、茶船は茶をのむによしなし、茶菓子にならぬ饅頭舟は、永久橋の名にも似ず、大學の五章とともに今は亡びたり、狸にあらぬ土船を見ては、岡なるかとうたがひ、水船をのぞんでは、底なきかと怪しまる、船の數のおほき事は、いふもさら也、筏は禪の氣骨有て、一すぢに九年も流るゝおもひなるべし、終には岸につき、ゑいとうゑいとうの聲に其身を放下して、万本の筏も、只一本の鳶口ばかり殘り、筏士は陸路をへて家に歸る、こや萬法一に歸すといふ、本來の眞面目なるべし、

〔四十二物詠〕ひやうぶ卿のみやより

衣うつおとと　夜舟こぐ音と

ころもうつ宿には夢もかよひけりねられぬものは夜ぶねこぐ音

〔蜀山百首〕春二十首

みわたせば大橋かすむ間部河岸松たつふねや水のおも梶

○

〔倭名類聚抄十船〕桴筏　論語注云、桴編竹木、大曰筏、音伐、字亦作艨、小曰桴、音浮、玉篇、字亦作解、在舟部、和名伊加太、

〔箋注倭名類聚抄三舟〕按桴、說文作泭、云編木以渡也、爾雅、楚辭、國語、詩毛傳、亦皆作泭、後人諧聲作桴、遂與棟桴字混、今本玉篇舟部云、解亦作桴、按、此正文、引論語注作桴、故引玉篇變云亦作解也、

〔類聚名義抄三舟〕解音浮、イカタ、〔同三木〕桴字亦作解、イカタ、〔同八竹〕筏俗栰、イカタ、　簰イカタ、或潭、

〔伊呂波字類抄伊雜物〕筏イカダ　桴　棧已上同